

第一章　いついかなる時も言う事を聞く

次の日、普通に出社し、午前中はセミナーの報告書を書いて社長に提出する。昨日手伝ってくれた社員の人達にお礼を言い、席に戻って一息ついている時だった。私のメールに朝比奈からのメッセージが届いている。

ー これは俺の個人ラインアカウント　早急に登録しろ　ー

あ、言う事を聞くんだった。一カ月は長いなあ…。

ー 登録しました　ー

すると直ぐにラインが来る。

ー 契約通りにしてもらってありがとう。じゃあ今日は一緒にランチに行くから　ー

ランチ…まあランチくらい別にいいか。奢れとは書いてないし、契約には体に触るって書いてあっただけだし。

ー わかった　ー

お昼になって事務所を出ようとすると、彼が私の所に来て言う。

「じゃ、行こっか」

「はいはい」

半分嫌々ながら、私は彼と会社を出た。すると彼が言う。

「クリスマスで混むといけないから、ランチの予約取ってる」

「えっ？ わざわざ？」

「いいから」

彼に黙ってついて行くと、お好み焼きともんじゃ焼きの店だった。ちよつと意表を突かれてしまう。

「意外なところ…」

「嫌いだっけ？」

「いや、むしろ好きだけど」

「そっか」

そうして彼が店員に言う。

「予約していた朝比奈です」

「はいどうぞー！」

そして私達は賑やかな座敷席を抜けて、奥の個室へと通された。

「すごい混んでるな」

「そりやそうよ、平日とはいえ巷はクリスマスイブだから」

「予約取っておいて良かった」

そうして私達は個室に入った。

「俺が好きな頼んでいいか？」

「いいけど、奢らないわよ」

「馬鹿。俺が奢るんだよ」

「えっ？」

そして店員に言う。

「生エビ玉天、牛スジネギ焼き、ミックスもんじゃ、海鮮野菜盛り。あと黒ウーロン茶二つ」

「かしこまりましたー」

そう言って店員が出て行く。

「どういう風の吹き回しよ」

「いや。ただ食いたくなって思って、俺が勝手に連れて来たからだよ」

「ふーん」

そうして最初に、生エビ玉天、牛スジネギ焼きが届いた。店員が個室を出て行くと、彼が向かいの掘りごたつ式の席から立ちあがる。トイレかな？　と思つて見てみると、なんと私の方に回つてきて隣に座る。

「ちよ、なんで隣？　狭いじゃない」

「契約」

「……」

すると彼は私の腰に手を回して来た。

「ちよっ」

「いついかなる時でも体のどこを触つてもいい許可を与えます。だろ？」

手を払いのけようとしたが、約束を思い出してそのままにした。彼は私の腰に手を回して体を密着させて来る。

なによ……。

それ以上どうするかと思つて黙つて見ていたら、腰から手をどけてお好み焼きを焼き始めた。ジュージューと二枚のヘラを使って焼く彼は手際が良く、あつという間に丸く形どつたお好み焼きが目の前に二つ。

何がしたいんだろう？

とりあえず、お好み焼きを焼く手際の良さを褒めてみる。

「上手じゃない」

「お好み、好きなんだよ」

そう言つてヘラを置き、また私の腰に手を回して来た。

まあ約束は約束なので、私は抵抗せずにふつつと焼けて来たお好み焼きを見てる。

「焼けるまで時間あるから」

「まあ…そうね」

すると彼は腰に回した手に力を籠め、反対側の手を私のスーツの下に潜り込ませて来る。

「あ…」

「契約」

そうだった。ーいついかなる時でも体のどこを触ってもいい許可を与えますー お好み焼きを食べている時は除外するなんて書いてない。彼は私のお腹のあたりにするりと手を入れて、スルスルとそれを上に登らせて来る。

めっちゃめっちゃセクハラするじゃない…。

私はあの約束をちよつと後悔し始めた。こんなにあからさまに触って来るとは思つてなかったから。

手はそのまま、ブラウスの上から私の胸を触る。

「意外だ」

「な…なにがよ」

「おっきいんだ」

私はFカップあるので小さい方ではないが、仕事では講師の先生などの対応もするので胸が強調される服は着なかった。だから皆には私の胸が大きいことは知られていない。

「悪い？」

「いや。悪いとは言っていない」

そうしてゆつくりと左手を動かし始める。ブラウスとブラの上からとはいえ、こんな勝手に触られるなんて…。彼はじつくりと私のおっぱいの形を確かめるかのように、ゆつくりとおっぱいを揉んだ。

「めっちゃハリがある」

「そんな事無い。もう二十四歳だし、そろそろ形も気になりだしたわ」

って何を言っているんだろう。私は大胆にセクハラを受けているのに、目の前のイケメンを拒む事が出来ないでいる。

「柔らかか…」

個室で、ぐにぐにとおっぱいを揉まれていると変な気分になって来る。

んん…ちよつとお…。

私は目の前のお好み焼きに目をやって、変な気持ちになるのを避ける。

「焦げるわよ……」

「おつといけねえ」

彼は両手を外して、二つのヘラを持ち、器用にお好み焼きをひっくり返した。

「うまそ！ 丁度良い感じだ」

「お好み焼きだけは、上手く焼けるのね」

「一言、余計だよ」

すると彼はしばらくお好み焼きに集中して、焼けた上にソースや鰹節と青のりをかける。

「マヨかけて良いの？」

「うん。おいしいわよね」

綺麗にマヨネーズをかけ、私のお皿に取り分けてくれた。

「ここの美味いから」

パクッと一口食べると、確かに柔らかくてふわふわで美味しい。無駄にお好み焼きを焼くのが上手いみたい。

「おいしいわ」

「だろ？」

それから二人はお好み焼きを食べ始め、彼の皿が空っぽになった時、お好み焼きを食べている私の腰に手を回して来た。

…サカる年？ 二個上だね？

そう思いながら、無視してお好み焼きを食べていると、するりとお尻に手を回して来た。

チラリと彼を見ると、彼も私の顔を観察するように見て来た。なまじイケメンなので、ちょっと恥ずかしくなってくる。

「食べてるんですけど…」

「いついかなる時もだろ？」

「もう…わかったわ。好きにして」

そして彼に体を触られながらも、お好み焼きをばくつついている。はたから見たら、どう見てもバカッブルにしか見えないと思う。

すると入り口がノックされた。彼はスッと私から手を引いて言う。

「どうぞ」

ミックスもんじゃ、海鮮野菜盛りが運ばれてくる。私達が並んで座っているのをチラリと見たが、特に気にした様子も無く店員さんが言う。

「ご注文は以上でよろしかったですか？」

「はい」

そして店員さんは扉を開けて出て行った。すると彼が鉄板の半分に海鮮野菜盛りを並べ、もう半分にミックスもんじやを焼き始める。これもまた手際が良く、あっという間にもんじやが出来上がった。すると彼は私に小さいヘラを渡してくる。

「はいこれ」

「あ、ありがとう」

そして二人でもんじやをつつき始めた。すると彼はもんじやをすくってフーフーして、私にその小さなヘラを向けてくる。

「はい。どうぞ」

「じ、自分で……」

「言う事を聞く」

「わかった」

パクっともんじやを食べた。程よく冷めていて美味しいが自分でも出来るってば。

何故か彼は、甲斐甲斐しく私の世話をするかのように、料理をとりわけヘラでもんじやを食べさせた。

「これがしたかったの？」

「そ」

よく分からないが、何故か馬鹿いちゃカップルみたいなことがしたかったらしい。全部食べ終えて黒ウーロン茶を飲み干すと彼が言う。

「ランチの時間いっぱいだ。会社戻るぞ」

「ええ」

そしてお会計を済ませた彼について店を出る。すると店でもらったガムを私にくれた。

二人でガムを食べながら歩いていると、彼が言う。

「二人して油の匂いさせてたら、皆なんて思うかなあ！」

なんかめっちゃ楽しそうに言っている。

「何よそれ。たまたまだと思うでしょ」

「そっか。まあそうだな」

変なセクハラまがいのランチを終えた私達は会社に戻り、また午後の仕事に就くのだった。

全く意味が分からない……。